



SUKUMIKO THE SHAMAN GIRL

スゥミコ!

紺な巫女ってありえないくない?

小説 神楽陽子
挿絵 黒澤清崇

立ち読み版

第一章 紺な巫女ってありえなくね？

第二章 緋袴の中は男子禁制！

第三章 秘湯の混浴アプローチ

第四章 マゾな巫女と後ろのボク

第五章 巫女祭りでおおはしやぎ！

エピローグ 夏休みは終わっていないから

登場人物紹介

Characters



あずまや こたろう 東谷小太郎

内気で素朴な少年。綾にもセシルにも好意を持っているが、それが異性としてなのかは自信がない。

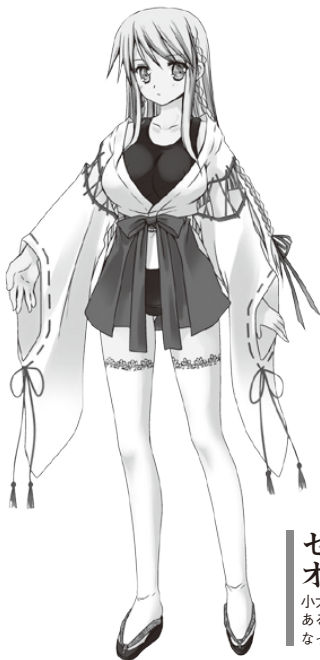


まいちじあや 真一寺綾

実家の神社で巫女として働く小太郎の幼馴染。夏祭りの舞いの練習をするため、彼に手伝いをさせることに。

セシリア=K= オルメイデ

小太郎の幼馴染で、バレエの教養があるため綾にダンスを教えることになった金髪碧眼の少女。



ふたりはラズベリーみたいな舌で、包皮の上から、傘の位置をぺろぺろと舐めた。摩擦の刺激そのものは薄皮に遮られて弱いものの、ふたり分の湿った吐息が勃起にまわりついて、心地よい。

（うわっ、綾ちゃんたちの舌が、れろれろって動いてるよ！）

そのうえ「舐める」は「触る」よりも幼稚で淫猥だ。見ているだけでも興奮し、衝動的な劣情をそそる。

上からのアングルで撮影も欠かせず、ハメ撮りに出演中の巫女は真っ赤である。

「撮影は、んあふ、や、やめてくれ……こんな私を、あむ、撮るな」

「撮ってどうするのよ、えあう、このヘンタイ、んっ、んうぐ」

小太郎から見ても、綾は右、セシルは左で跪き、豊満な肉体をやや反らせていた。注連縄でスクール水着ごと縛つてあるのだから、身を振つたりするたび、縄が食い込む。

「こら綾ちゃん、ボクのこととは？」

「んうむっ、あむ……ご、ご主人サマで、いいんれしょ？」

反抗的な綾は悔し涙を滲ませていた。しかし、自分より従順なセシルに対抗して、下手なりに舌を動かす。

セシルの舌は一回の動きが大きい。

「へあ、えれえろ、こ、これがふえらひお、なのか」

味を確かめようと積極的で、においを嗅いでもいるようだった。

「ちゃんとお風呂で、つはぶ、洗いなはいよね」

逆に綾のほうは動きのひとつひとつが小さいものの、回数が多い。異臭を嫌がるにしては至極丁寧に剛直をなぞり、くすぐってくる。

「いいよ、ふたりとも、くっ……はあ、次は皮をムイムイして」

続いて皮を剥き降ろしてもらう。しかし綾もセシルも両腕を背中で固く拘束されているため、手を使うことは許されなかった。

かといって、唾液で汚れた唇で、包皮だけを器用に摘むのは難しい。

ふたりは横笛を咥えるようにして、サオに優しく歯を立てた。

「ソうふぐ、さきつちよ、むくの？」

「べとべとだ……えあ、すべってひまう」

そして噛んだ部分を下へとスライドさせようとするのだが、右と左がばらばらに動くせいで上手に剥けない。

皮を斜めに剥いただけでは、肉厚の笠が引つ張り戻してしまふ。

「綾殿、私に合わせてくれ。つぶあ、こうやつへ、ンぐ、引きずるみたいに」

「そんなこと言われたって……に、ニオイだつてすごいし、んうふ？」

タイミングがぴたりと合わないのは、セシルの唇は吸い付きがよいのに、綾の唇はすぐ

息継ぎを挟むからでもある。

その間もペニスは膨張し、「幹太り」の形になっていた。先端の薄皮が剥けないことはエラを全開にできず、煩悶させられる。

「ちゃんと一緒に、はあ、息を合わせて……神前の舞いと同じだよ」

少年のアドバイスに従い、綾とセシルがアイコンタクトを取って頷きあう。

今度こそ唇は右も左も同時に皮を剥き降ろし、雁首の黒ずんだ赤色が露出した。亀頭が水を得たように膨らみ、ぼつてりと腫れあがる。これで勃起は完了だ。

「あおおむっ、ン、きやつ？ はあ、す、すごい、れる、かはくって……」

先端がもう一段飛び出すような「変身」に綾が驚きつつ、剛直を舌で這い上がる。

セシルの舌も這いまわり、サオに唾液を塗りたくる。

「それだけではないぞ、んむっは、なんとという熱さだ、貴公のこれは」

「こらセシル、ボクのことはご主人様って、くっ、くはああ！」

自称・ご主人様は思わず、人を従えるにしては気の弱そうな声を上げた。包茎のため先太はただでさえ刺激に不慣れなのに、ふたりがかりで舐められては、たまらない。

灼けた吐息と熱い唾液で充分に温まったところで、先に綾が、剥き出しの亀頭にぬらりと舌を乗りあがらせる。

「あたひが呼んであふえるわよ、ごしゅじん、はまって……んっあおえれ」

そしてセシルに見せ付けるように、べろりとひと舐め。

「うっうあ？ あ、ああ、綾ちゃん！」

快楽神経へのダイレクトな摩擦が電流じみて感じられ、男の子は反射的に弱音みたいな恥声を漏らしてしまった。甘い痺れが股間を駆け巡り、筋肉の力を奪おうとする。

（これがフェラチオ？）

セックスは経験済みなのだから、と自惚れていたかもしれない。

「んっぶ、れえお……こおするんれしょ？ おあつ、えへあ」

舌のぬるつきは肉棒を慰めるのがとても上手だ。唾液のおかげで痛すぎることなく、吐息もひとつの刺激となつて雁太を包み込む。

堪え性のない肉棒は早くもガマン汁を先走らせ、優しすぎる唇に甘えた。

「わ、私もいるのだぞ、ご主人様、んおおあ、あっは」

しかも左右対称にもうひとり、セシルも亀頭へと舌を運んでくる。綾よりも一回の動きを大きくのたくらせ、唾液の玉をいくつも垂れる。

ふたりの舌が織り成す絶妙な快楽のうねりに、腰が抜けそうになった。

「すすすすごいよ、はあ、これ、気持ちいい！」

危うく落としかけたカメラを構えなおし、年上のお姉さんがふたりがかりでおしゃぶりするシーンを、まじまじと撮影する。

「撮影は……つらめ、ご主人サマ、ちゃんとひやぶるはら、それだへはゆるひて」

綾の目つきはご主人様に対して少々反抗的だ。それでも卑猥な遊びの自覚が強烈にあるらしく、猫のような瞳に初心な涙をたたえていた。

先太の反対側ではセシルも真っ赤になって、カメラの方向を覗き込む。

「こんなものを、あぶつ、撮つてどうしゆるつもりだ？ んむはあ」

ふたりとも無理に舌を出すせいで、すらりとした顔立ちが歪んでしまっていた。喋れば舌足らずな口調になるのが、ご主人様に甘えてくるみたいで可愛い。必然的に鼻が肉棒に近くなるので、においを嗅がせることもできる。

湿った摩擦は弾けるようにも感じられ、ペニスを痺れつかせた。爪先立つてでもないかと、せっかちな赤ちゃん汁が飛び出してしまいうさだ。

快楽電流に先端を焼かれながら、少年は興味本位で質問した。

「ボクの、におうかな……はあ、ほーけいだからっ、その」

勃起すれば剥けるとはいえ、包皮の裏側にはチンカスが溜まっているはず。

それでもセシルは、あからさまには嫌悪せず、呼吸のたびに臭いを嗅いでいた。首だけでなく腰も捻って、舌を一旦サオへと戻す。

「清め甲斐のありそうな、つぶあは、モノと思えば……えあ、ろおということ」

顔を近づけすぎるものだから、ブロンドの前髪が肉茎に引っ掛かってしまう。彼女の唇

はさらに下に降り、魔除けの鈴をちりんと鳴らした。

「くさいわよ、ばかあ、っおおふ！ほんと、きたなひオチンチン、ね」

一方、綾の腰はさつきより引けており、ツインテールの位置も気にするなど、ペニスとの接触を避けている節がある。口奉仕はあくまでセシルに対抗してのものなのだろう。

唾液が多くなるにつれ、猥音も鳴り、フェラチオを淫靡に奏でた。

ちゅっぢゅる、ちゅば！ちゅばっ、ぢゅ！ずちゅ！

ふたりとも至近距離で正面から向かい合うため、巨乳と巨乳がぶつかる。

たわわな乳果は重さを比べあうように、相手に乗ったり、相手を乗せたりしていた。紺色のスクール水着も擦れあつて水分を交換する。

巫女たちが時々身を振るのは、注連縄が原因らしい。

「っはあ、んえろ、これ、さ、さつきよりカラダに食い込んで……？」

綾が緊縛のスタイルを見下ろし、色っぽい息を吐く。時間が経つほど、注連縄はびしょ濡れのスクール水着から水を吸収し、縮んでいようだ。

セシルも袖の装いから食み出たお尻を震わせ、食い込みに喘ぐ。

「ご主人様、私は、つくう、反抗はしないから……は、外してもらえないか？」

「だめだよ。それよりもっと、はあ、オチンチンしゃぶってくんない」と

かくいいう少年も一種の責めに悶えていた。彼女たちの舌がとまると、恐ろしいむず痒さ

が先端に集中し、憔悴させられる。

また、ふたりの舌使いは男根の形に沿って丁寧ではあるが、もどかしい。

「セシルにはこないだ、ふうつ、オッパイで挟んでもらったから、綾ちゃんかな？　ボクのさきつちよ、うあ、ぱつくんしてみて」

理由もつけて注文すると、綾がむすつと眉根を寄せた。

「オッパイで挟んでもらったって、何よ？　セシリアさんとそんなことまで」

二股中の少年が浮気の内訳をうっかり白状してしまったわけ。

「小太郎殿？　綾殿よりも私が」

「あ、あたしよ。あたしが……してあげるんだからね？」

セシルが横取りしようとする、負けず嫌いな綾の覚悟は決まったようだ。数回の深呼吸の後、緊張気味に唇を広げ揚げなおす。そして男の子のさきつちよを、涙目になつても頬張り、窄めた唇を雁首にキュッと嵌め込む。

「んもおおぐ、うぐう、しゅろくおっひい……どお？　こはつ、ごしゅひんはまあ」

彼女にとつては一言二言喋っただけ、のつもりだろう。

しかしご主人様は瞬きも忘れ、始まってしまった快絶に苦悶した。

「うあああああつ!!　しゃつ、しゃべらないで、あつうく、んくいいいいい！」

処女を散らされた女の子みたいなの、狂おしい悦がりぶり、おあずけを食ったセシルを

ぎくりと驚かせる。

「だ、大丈夫なのか？ 小太郎殿、ものすごい汗だぞ」

「ここつれえ、そんはによわいの？ だっはら、んおあぐ、んぢゅつぷ！」

恥ずかしそうに綾は頬を染めながらも、マゾな肉棒に舌をねっとり絡みつかせた。熱い唾液も快楽神経に染み込んで、腫れた亀頭を温めてくれる。

「これほんと、すごい……つはあ！ うはあ、あつああそこ！」

口の中は、肌とは比較にならないほどの高温だ。雁太を乗つけた舌が中央で動くため、感じるうねりも凄まじい。

ぢゅぱっ、ぢゅぱ！ ぢゅつぷず、ずぢゅ、ずぢゅ！

締まりのいい唇が吸い音を派手に立て、両端から玉の涎を垂らす。

口が塞がっては鼻で呼吸するしかなく、ペニスの異臭で鼻から涙腺を刺激されたのか、綾の瞳では健気な涙が膨らんでいた。

「こおやつへ、あはしあキレイに、ンあぢゅ！ はあつぶむ、あもおぐ！」

ぬらつく舌は表と裏を入れ替えながら、右にまわり、左にまわり。特大の飴玉を転がすみたいに、「弾く」動きもある。

強い痺れに肉棒を焼かれて、少年は軽い発作に陥った。

（気持ちいい！ すごい、よすぎるくらい！）

勃起状態でなければ尿でも噴かせていたに違いない。それほどの熱量がみるみる股底で溜まり、前方への圧迫感を生み出す。腰を突き出したのは、そのための脊髄反射だ。

疎かになっていた撮影を再開し、破廉恥なファーストキスをねめつける。

「んぐっう……ぷはっ、はあ！ んあ、い、息……続かないってば」

しかし綾は一旦唇からペニスを外し、息継ぎした。

その隙にもうひとりの巨乳巫女が前に出て、赤腫れた亀頭を啜え込む。

「私にもできるぞ、ご主人様……ンッうおぐ、おっ、おむう！」

「セッ、セシル？ ちょっと休ませ、あつ、ああああ！」

淫猥な刺激の連続に勃起がのたうち、鈴を鳴らす。赤面しつつセシルは唇を下へと引きずり、雁首にちゅうつと吸い付いた。

端正なフェイスラインがひよつとこみたいに伸び、圧力を高める。

ず……ずちゅ！ ぢゅぷっ、ぢゅ！ ずずず！

こちらの唇は綾に比べて、舐めるよりも「吸う」動きが多い。尿道のガマン汁を吸い上げ、亀頭の全体に唾液をぬらぬらと浴びせる。

（フェラチオいいよ、すぐく！）

溶けるような快感に生理的な胸震えを堪えきれない。少年はご主人様ぶつていられなくなり、有酸素運動じみた快絶に喘ぐだけ。

呻えることで淫乱ぶりの自覚が出てきたのか、品行方正なセシルも、瞳に涙を揺らめかせた。そのまなざしこそ男の子の劣情をそそっている自覚はないらしい。

「あおうつぐ、ろおひてろんなに、つんぶ、おおひいのら？ こ、こへは」
「ちよつとセシリアさん、はあ、替わってれば、あたしまだ」

巫女たちの肉体はすっかり火照り、スクール水着も温もってきたようだ。頻繁に空腰を打ち、縄の食い込みを感じている。

ご主人様の足元で従順に跪き、オチンチンに誠意を尽くす。

淫靡な光景をカメラに捉えつつ、少年は美女ふたりの口奉仕に身悶えた。
(クセになっちゃいそう、これ！)

舌と擦れる刺激の心地よさは当然、女の子を屈服させるようなプレイスタイルも気分を盛り上げ、どんどん遠慮がなくなってしまう。

セシルの唇から涎の糸が切れないうちに、綾が再び頬張ってくれた。

「びふびくつれ、ひてる……まだ、はっあぶ、だはないれよ？」

お洒落なツイントールを傾け、唇でも捻りが決まる。舌の届く範囲が広くなり、エラの生え際まで丁寧に擦りまわす。

黒髪の巫女がいつまでも肉棒を独占し、頬の片方を膨らませていると、もうひとりの巫女がプロンドの髪を振りまわした。

「ずるいぞ、綾殿？ もつと私にも、あおんぐ、ううむっ」

「だ、だめよ、セシリアさん！ 命令されたのは、あ、あたしだし」

サオから這い上がるコースで雁太を強引に奪い取り、熱心にしゃぶる。くさいほどの性臭と淫らな舌遊びのせいで、彼女たちもかなり興奮しているようだった。

「仲良く！ つうはあ、ちゃんと仲良くして！」

ご主人様が命令しても、ライバル対決はヒートアップするばかり。痺れを堪えられなくなってきた敏感な亀頭に、綾は右から、セシルは左から舌を這わせる。ふたりの力が拮抗して、どちらも頬張ることができない。

「んぶあはっ、ごしゅじんはまのは、あう、ぶつといから、たいへんだな」

セシルの舌は動きがべろりと大きく、それこそ犬みたいだ。由緒ある家系のレディとはとても思えない。お尻をしきりに振つてもいた。

「くはい……なんなのよ、これ、つあぶう！ ごしゅひんサマは、たのひいの？」

綾の舌はちろちろと小刻みに笠の裏を穿り、不潔なチンカスを舐め取っていく。注連縄で縛られたうえに、汚いペニスをしゃぶって感じるのだから、これでは巫女失格だ。

ぢゅっぢゅる！ ぢゅぶっ、ぢゅば！ ぢゅっぢゅぢゅ！

二枚の舌がうねる隙間で、オチンチンが真っ赤に昂る。肉体の一部とは思えない硬さの中へと、血液が無理やり流れ、力むような疼きを漲らせる。



「こ、こんなふうでいいの？ ご主人さま」

「私はその、よ……読み上げないでくれ」

漢字が得意なセシルの絵馬板は「中出し祈願」なかだしきがん「精液便所」せいえきべんじょなど、とんでもない。

小太郎は絵馬を回収し、そわそわと胸を高鳴らせた。

「うん、いい感じだよ。っと、胸は隠しちゃだめ、袖のけて」

ふたりの巫女が袖を左右に降ろし、スクール水着ごと注連縄で縛られた、実り豊かな乳果実を見せびらかす。唇から垂れたスペルマの糸は切れていない。

悪戯好きな少年は綾の絵馬をセシルに括りつけた。

「ご主人様？ あっふあ、や、やめてくれ、ひくう、そんなところに……！」

しこり勃つ乳芽に紐で吊るすと、セシルが華奢な肩をわななかせる。

続いて綾の双角にはセシルの絵馬板をぶらさげてやった。

「ちょっとこれ、セシリアさんの……ちっ、ちが、あたし便所なんかじゃ、くふ！」

これで「ちんぽ大好き」で「ミルクちよおだい」な金髪の巫女と、「中出し祈願」で「精液便所」な黒髪の巫女が完成する。

まさか自分のオッパイに、それもライバルの変態性癖を吊るされるとは予想になかったらしい。ふたりとも恥ずかしさに打ちのめされて赤面し、涙ぐむ。

けれどもご主人様は容赦しない。こうして責めることがどんどん楽しくなってきた、自

制するのがもつたないくらいである。

「ほらほら、エッチしてあげるから、立って。ボクにお尻を向けるんだ」

綾とセシルはおずおずと立ち上がり、腰が不自然に引けた姿勢でターンした。壁に両手をついて、注連縄がきつく食い込んだお尻を差し出す。

命令されずとも股を開く従順さが可愛い。

「こ、これでいいでしょ？ あはあ、い、イジワルしないで」

むちむちの太腿は汗ばんでおり、そこには気の早い淫液も垂れていた。

股座をくぐる縄は二本で、中央が開くようにはしてある。ただし、スクール水着を着ているため、ここから挿入するのは難しそうだ。

「でもオチンチンはひとつだけだからなあ……そうだ！ じゃあ、おみくじでいい結果が出たほうからしてあげるよ」

そこでご主人様は六角形のおみくじを取り出した。振ることで中から結果が飛び出してくるタイプで、太さの直径は二センチほど。

「おみくじとは？ ……あつ、そ、そこは、ご主人様！」

「ここを弄らなくっちゃ、始められないよ？」

先にセシルの股座へと指を差し込み、縄の隙間でスクール水着をのけ、ピンク色の秘裂を裸にしてしまう。そこにおみくじを嵌め込むと、プロンドの髪が優美に翻った。

「くああ？ 何を入れ、はっあう！」

日本文化に疎い彼女は、おみくじが何なのか理解していないらしい。

変態じみたプレイの応酬から綾は引き下がろうとするものの、逃がさない。ご主人様は彼女の股間も同様に暴いて、おみくじの筒を挿し込んだ。

「へ、ヘンタイ！ 女の子に……んはっ、こんなことして、ばかあ」

バカ、という言葉とは裏腹に、どこか心地よさそうな音色の声だ。純和風の巫女は当然おみくじを知っており、稚拙ながらに腰を振り出す。

（これはすごいビデオになっちゃうぞ！）

すかさず少年はカメラを構えなおし、ふたりの巫女がオマ○コクジに喘ぐシーンを観察した。セシルも綾を真似て、おみくじの筒を上下に振るう。

淫液はみるみる増量し、太腿の内側はべとべとだ。綾は黒、セシルは白のニーソックスにも染み込んで、室内に牝のにおいを充満させる。

「ひあっ、は、だめえ……こんなの、んあ、おかしくなっちゃう」

「もう腰が勝手に、ああまた、とっ、撮らないでくれ……！」

被写体である年上の女の子は真っ赤になっても、浅ましいダンスをやめようとしなない。辱められる羞恥だけでなく、自慰的な快楽にも見るからに翻弄されていた。

それぞれのおみくじが運勢を愛蜜で濡らす。

綾は吉で、セシルは末吉。

「巫女さんが凶なんか出しちゃだめだよ。これは罰が必要かなあ？」

しかし彼女たちは股座を覗くことができないため、運勢は少年の嘘の通りだ。怯える巫女の手がそれぞれ、オナニーみたいな指繰りでおみくじの結果を引っ込める。

感覚を取り戻した肉棒はちきれんばかりに膨張し、魔除けの鈴を鳴らしていた。

しばらくはカメラをまともに構えていたらそうにない。

「セシルはカメラ撮ってて。はあ、持つてるだけでいいから」

「これを？ よ、よくわからないのだが……」

撮影はセシルに任せて、小太郎は綾の背後を取る。

（よおし……まずは試しに綾ちゃんと）

手始めに艶やかな太腿を撫でてみた。牝の肉体は充分火照っており、発情のエキスも嗅覚に染みるくらい芳しい。

「ご、ご主人サマ？ んふあ、次はどうするの？」

不安いっぱいの巫女は壁に両手をつけて、身体を強張らせるばかり。

「いよいよお仕置きだよ、とっておきのね」

そんな彼女を怯えさせながら、締めた注連縄がばらばらにならないよう丁寧にお尻の谷間に食い込む一本だけを緩める。

あとはスクール水着を限界まで引つ張れば、何とかお尻の一部が露出した。

「くうう、はあ、さ、さつきよりキツイ……！」

その分、身体の全体で縄の締め付けがきつくなつたらしく、たおやかな背が弓なりに。巨乳がたゆんと揺れ、巫女の息を荒らげさせる。

(こっちはどんなふうになつてるのかな)

前の穴よりも疚しい誘惑に満ちた「そこ」に指を当てると、綾の腰がびくつとした。

「こっここ、コタロー？ そこちが、くふつ、や、やだあ！」

いやいやとかぶりを振つて、ロングヘアとツイントールを混ぜつ返す。

小太郎が突つついたのは肛門だった。可愛い女の子でも排泄する、という事実が下劣な興味をかきたてる。尻穴はひくひくと怖がるみたいに疼いていた。

そこだけセピア色に染まり、小さな皺が集まつている。

「欲しいんですよ？ オチンチン。だけど綾ちゃん、はあ、大吉出さなかつたから」

モノが出るのだから、入れることもできるはず。

暴れるお尻を捕まえ、挿入の気配を強めると、純和風の巫女はひどく狼狽した。

「まま、待つて？ ご主人サマ、言うこと聞くから、そ、それだけはやめて！」

「言うこと聞くんなら、こっちでしょうね。はあ、セシルもよく見てて」

しかしご主人様は躊躇せず、愛液で剛直をべつとりと濡らしてから、アナル処女に独占

欲の狙いをつける。

従順なセシルは言いつけ通りカメラを構えていた。

「本当にしてしまうのか？ ご主人様、オシリなどで……」

「やだっ、セシリアさん撮っちゃや……あ？ あいい、いいいい！」

カメラの前で、少年は嫌がる女の子にとうとうお仕置きを始めてしまう。

ずっ、ずぶ……ずぶ！

自分の硬さが彼女の柔らかい体内に割り込んでいく感触がたまらない。けれども尻穴はとても強情で、易々と侵入を許してはくれなかった。膣のように外に向かって広がってはくれず、内に向かって閉じているみたいだ。

「くっう！ 綾ちゃん、も、もっとチカラ抜いてくんないと！」

入り口からいきなり狭すぎて、肉厚の笠が入りきらず、押し出される。かといって無理やり押し込もうものなら、彼女の肛門が壊れてしまうかもしれない。

雄々しい剛直もめりめりと軋む。

綾は肩越しに振り向き、珍しく弱気な瞳で中断を訴えてきた。

「無茶しないで？ オシリだなんて、つひはう、ヘンタイみたいなこと……」

そんな悩ましい仕草が興奮に拍車をかけ、劣情を燃え上がらせる。少年は曲線のついたスクール水着を撫でまわし、恥ずかしがり屋を宥めた。



間に肉太のオチンチンを丸呑みにしてしまった。少年から押し込んだのではない。

肛門の中には掃除機並みのパキュームが隠れていたのである。

「や、やだあ、オチンチンの形、ひはっふ、わかっちゃう」

全身が蒸れすぎている尻穴巫女は、直腸に待機する異物感に戸惑っていた。

男の子のほうで感じるアナルは、熱くぬめっており、肉よりも「液」の感触が強い。膣のような「ヒダヒダ」はさほどないようで、雁太は煮えたスープに浸されている。

「くうっは、はあ、すごいよ！メチャクチャ締まってる！」

膣ともっとも異なるのは、締め付けの「位置」だろうか。出口の近くにだけ苛烈な力が集中し、サオの根をぎりぎり食い締めてくる。

しかし液体のぬめりが多いおかげで、痛みはない。

「ご主人様……はあ、そんな、気持ちよさそうな声は出さなくてくれ。私まで、んっんあは、おかしなコトをしてしまいそうで」

カメラ係のセシルは見ているだけでいられず、空いた手で自ら股間をまさぐっていた。おみくじを指で弾いたりして、オナニーに挑戦している。

けれども自分の指使いでは上手に快感を作り出せないらしい。もどかしそうに腰を捻りながら、ご主人様を待ち侘びていた。

「ごめんね、セシル、はあ、すっ、すぐにセシルにもしてあげるから」

待たせてしまつては、セシルのいう「紳士」失格だ。ひとまず綾のアナルバージンから平らげるべく、抜き挿しを試みる。

「まだ動かさないで？ んふあつ、お願いだから……あつ、えへあああ？」

プライバシーを無遠慮に穿り返される綾がしゃくりあげた。

ぶりゅつ、ぶりゅぶりゅ……ぶりゅりゅ！

肛門が排泄と同じ音を立て、肉太をひり出す。

いつもこんな汚い音を立ててモノを出している、とすれば、巫女として大問題だろう。綾の表情は羞恥と、肛門に与えられる刺激で真っ赤に茹で上がっていた。

「耳ふさいで！ やだこんな音、んくあ、あつあたし、ちがうの、これはっんふ！」

耳を塞いでなどいられない。綾は壁に、小太郎は彼女のお尻に、両手を叩きつけるようにしてしがみつく。

「っうあ？ ち、ちよつと待って、綾ちゃん、あああああ！」

まだ「抜く」動きの最中だったのに、ペニスが凄まじい吸引力に捕まった。奥へと連れ戻され、腫れぼったい亀頭に煮えた液が絡みつく。

少年が一旦腰をとめようにも、ストロークは勝手に始まっていた。

「んはっだから、動かはないれって、ひぐつ、いつへるじゃない、ばかあ！」

「ボクは何も……あつうあ、すごい、お、オシリの穴が動いてる！」

蒸し暑さは気温でも湿度でもなく、発情のせいだろう。

金髪の巫女がこっそり抜け駆けして、男の子の玉袋を掴んだ。

「うっ？ はあ、あ、いい……いいよ」

「コタロー？ ど、どうしたの？ なんか声……」

「う、ううん！ なんでも」

綾の後ろでセシルと浮気しているのは内緒だ。あくまで小太郎は綾の太腿をさすり、お尻だけでなく細腰にも手をよじ登らせていく。

「小太郎殿……っあふあ、す、すぐく熱いぞ？」

セシルの手は宥めるようにオチンチンをあやしてくれた。目で見ずともわかるほど上品な手つきで、玉袋を優しく押し揉み、寧丸を圧迫する。

もう片方の手でサオを手に取り、包皮を剥き降ろす。複数の指は爪を立てないように、亀頭もくにくにとくすぐった。極上のチンポマッサージだ。

（なんだかセシル、積極的になってる？）

イクことも知らなかったはずなのに、今夜は両手を使ったテコキで少年を昂らせる。

柔らかい手に包まれながら、剛直は肉厚の笠を広げ、ガマン汁を先走らせた。

「セシリアさん、何を……やっやん、コタロー、いきなり？」

目の前のヨーヨーを弾ませると、綾の華奢な肩がかくんと脱力した。けれどもお姉さん

はやられっ放しでいてくれない。

「んはあ、ちよつと懲らしめてあげる。セシリアさん、もう少し後ろに」

「あ、ああ。んく、どうするのだ？ 綾殿」

名残惜しくもセシルの手が股座から離れた。その代わり、剛直の前後を湿った薄生地で挟まれてしまう。綾とセシルのお尻がぶつかり、谷間で肉棒を挟み込んだのである。

「うわわっ？ こ、これ、つはあ、なんていうの？」

なだらかな曲線のせめぎ合いが感じられる。シリズリとでもいうのだろうか。

ぬぬちゅ！ ぬちやつ、ぬちゅぬちゃ！

ふたりの巫女は息を合わせ、おしくらまんじゅうを始めた。濡れそぼったスクール水着のざらざら感が摩擦となり、肉太を抜きあげる。

「あはん、どお？ コタロー、んふっは、気持ちいいでしょ」

びりびりとペニスに痺れが走り、底のほうで火がついてしまう。ふたり分の体重が集中するため、サオを抜く力としては申し分ない。おまけにスクール水着にリング飴のぬめりがあるおかげで、痛すぎることもなかった。

けれども、このプレイは彼女たちにとってもハードなはずだ。

「だっただめだ、綾殿！ これは……オシリに当たって！」

リング飴を食べている最中の肛門に力がかかってしまいうらしく、品性を旨とするセシル

が慌てふためく。綾もスクール水着の両サイドを引っ張り上げて、お尻の谷間に薄生地を食い込ませるなど、危なっかしい。

(綾ちゃんも、セシルも……どっちもボクの！)

三角関係に頭を悩ませていたのが嘘みたいだった。女の子ふたりに挟まれる心地よさが癖になり、勃起も熱く興奮する。

提灯に囲われた視界は淫乱なムードに満ちて、喘いでいないほうがおかしい。

小太郎は忘れかけていたカメラを取り、巫女たちのダンスを捉えた。するとセシルが無理に振り向こうとするものだから、綾との押しあいへしあいが激しくなる。

「ずるいぞ、綾殿！ つあはあ、私だけ写らないなど、へえあ」

「押さないで、ひふつう、コタロー、あたしだけ撮って！」

やはり「仲良く」とはいかないらしい。それでも互いに肘を組み合わせ、おしくらまんじゅうの密着を深めた。ふたりがかりでペニスを挟み込むお尻の谷間は、スクール水着がリングお尻のせいでべとべとだ。

ぱしゃん！ ぱしゃつ、ぬちゅ！ ぬちゅぬちゅ！

ヨーヨーが水音とともに跳ね、柔乳の先端を引っ張りまわす。しかもお尻の穴でリングお尻を食べてもいるため、巫女の肉体は腰から上でも下でもよく弾む。

潤沢に満ちた綾の、スクール水着の肩紐が片方だけずれた。ヨーヨーも外れ、茹で卵の

ような白さの生乳がぼろりと飛び出す。

「やあっ！ み、見ちゃだめ！」

我が身をかき抱いて隠す綾の後ろで、セシルも対抗して薄生地を剥がす。

「また綾殿は、はあ、そうやって小太郎殿を、かどわかして……」

「か、かどわかしてなんか、コタローが、ン、見たそうにしてるから」

見られたくない、でも見て欲しい。そんな複雑な女心で頬を染めつつ、ふたりの巫女は露出を競いあつた。スクール水着をずらし、全部の生乳を踊らせる。

けれども、それではヨーヨーまで外れてしまう。

「ボクからのプレゼント、はふう、ちやんとつけててよ」

小太郎はどうか手を伸ばし、綾のスクール水着を巨乳に被せた。ただし肩紐には手が届かなくて、挑発的に乱れたまま。

エッチの最中なら聞き分けのよいお姉さんたちが、ヨーヨーを括りなおし、高まる乳悦に喘ぐ。同時に、お尻の谷間で挟んだ勃起の逞しさにも感嘆した。

「あはあんっ！ オシりに擦れて……んふはあ、こっ、コタローのかたすぎ！」

男の子の熱硬さを確かめるように、腰をくねらせて。

「かたいし、あっ、あついぞ？ ひあん、だ、大丈夫なのか、貴公？」

小太郎にも痛みのない火傷みたいに感じられる。薄生地と擦れまくるペニス、少年の

筋力以上に力んでおり、尿漏れみたいに熱くカウパーを漏らした。

穴に飛び込みたい衝動に駆られてしまう。

「も、もうガマンできないよ！ ボクの、はあつ、オマ○コで食べて！」

そう叫ぶと、綾とセシルがお尻の位置を高くして、ベストポジションを奪いあった。

「きゃっ？ や、やあん、セシリアさん！」

しかしセシルのほうが剛直に近い。スクール水着の股布を脇にのけたら、ブロンドの髪越しに顔だけ振り向きつつ、少年の勃起を独り占め。

「あふ、あたしが先に乗ったのよ？ ねえ、コタローも……」

「いくぞ？ 小太郎殿、んうう……うあつ、あはあああああ！」

おあずけを食った綾の、後ろにある肉棒に、淫猥な拡張感が降りてくる。ペニスだけでなく男の子の全身ものたうった。

ずぶずぶっ！ ずぶぶ、ずぶずぶずぶ！

狭すぎて、先日は侵入できたことが信じられない。おそらくセシルも同じで、途中で腰を上へに逃がそうとする。それでも牝穴は好物を欲し、粘った発情汁を多めに垂らす。

「すず、すごいよ、セシル！ セシルの中に入ってく！」

仰向けの少年は恥声を上げ、サオへと滑り落ちてくる感触を吟味した。煮えた粘膜には広がるよりも窄まる動きが多く、よく吸い付く。



刺激が強すぎて四肢が引き攣り、カメラを構えてなどいられない。

「んくふう、ふ、ふかすぎる……おつ、おへそまできてるぞ、ひえ、あへええ！」

根元まで嵌まったところで、凜々しいセシルの顔つきがとろとろになった。しどけない唇から舌が飛び出し、涎を滴らせる。裏返った声は甘ったるい。

碧い瞳は焦点が合っておらず、まどろむように牝の悦びをたたえていた。

（セシルの中にボクのが、ぜんぶ！）

たまらなくなつて小太郎も舌を出し、締め付けのよさを味わう。処女の時より締まつて感じられるのは、アナルも締まつているせいだろうか。

セックスだからこそ、セシルへの想いも膨らみ、胸がビートを奏でる。

「ちよつとコタロー、あふつ、セシリアさんで感じすぎないで」

「そんなこと言われても、はあ、き、気持ちいいんだよ？」

その胸の上で、嫉妬に燃える綾が股間を這いずらせた。小太郎の視界をむっちりとした太腿と、緋袴で囲んでから、スクール水着の股布を脇にずらす。

すると生えてもいない幼い秘裂が裸になった。艶やかなピンク色の肉唇が綻び、膣口の暗がりやさやかにカメラアピール。明るい場所のおかげで撮影は容易い。

「どお？ コタロー、あ、あたしの……んふあ、入りたいでしょ？」

誘うように彼女の手が巨乳を持ち上げ、ヨーヨーを揺らす。

「綾ちゃん、ボク、入るよりキスしたいな」

小太郎が囁くと、綾は真つ赤に照れた。

男の子の唇が綺麗なオマ○コにキスを押し付け、ちゅうつと吸う。厚みのある肉畝の間だけ、ぐちよぐちよで、キスの味わい深さは上のおくちに引けを取らない。

彼女の体温が粘液となつて舌に流れ込んできた。

「あはあああん！ こつ、コタロー！ ひはっあ、そこお、も、もつとしてえ！」

普段は甘え下手な綾でも、優しいキスにはとても素直だ。舌を挿し込めば、秘密の入り口がくばあと広がり、弱そうにひくつく。

甘酸っぱいにおいも濃くなり、嗅覚を本能的に酔わせた。

「だめだぞ、小太郎殿？ 今は私と、ふあっあ、せ……せつくすして、ひはああッ！」

しかし穴の観察どころではなく、肉棒でも快絶が始まってしまふ。

ヤキモチ焼きのセシルが腰を振り、下のおくちでオチンチンをしゃぶつた。両膝を土につけていても、太腿がバネとなつて騎乗位のダンスを支える。

ずっずちや！ ずちゅつ、ぐちや！ ぬちや！

玉袋へと熱いエキスが流れてきた。小太郎の意志とは無関係に、苛烈な締め付けがサオを昇つては降り、一生懸命に扱いてくれる。

腰でSの字を描き、ストロークにうねりもつけてくる。

「うあつ、あああ！ はげしい、はつ、はげしいよ、セシル！」

騎乗位セックスに踏みつけられて喘ぐ少年は、綾の太腿にしがみついた。肉棒は皮膚がなくなつたかのように敏感で、悦痺れが凄まじい。そこに、ぬかるんだ粘膜が波となつて何回も、何十回も被さつてくる。

「貴公のためなら、つあん、なんだつてする！ だから……ひはつあう、今夜はわたひのなかで、なかで出してくれ、んっ、んくふう！」

張り出たエラが進行方向に逆らうせいで、膣圧はいつそう高まり、肉襞がうごうごと勃起にじゃれついた。欲張りで甘えん坊なオマ○コだ。

膣の締め付けを味わいながら、少年は目の前のキスを深める。

「こらっ、コタロー！ セシリアさんより、ひはつ、そこらめええ！」

途端に綾も競つていられなくなり、切なそうに喘いだ。男の子の舌が女の子の入り口をこじ開け、クリトリスを弾いたのだ。甘蜜が一気に溢れて、溺れそうになる。

「どっちも、んうぐ！ す……あむう、んっおおぐ」

たった一言の「好き」も言えない意気地なしは、それでも夢中で舌をのたくらせ、異性の味をひたすら求めた。肉唇をかきわけ、煮立った発情汁をすすする。

柔肌の温もりも欲しくて、スクール水着へと手を這わせ、柳腰を抱きかかえる。

「ちゃんといいなはいよ、ばか、つあふ？ こ、こんなキスばかり上手……ええあ！」

告白を期待していたらしい綾は、少年の頭に両手で掴まり、もつたいぶつた舌の動きに煩悶した。そうやって綾を慰めつつ、小太郎はセシルとも熱烈にもつれあう。

「っはああん！ 小太郎殿のが、すっ、すごくおくまで！ れあっこれ、きてる、あたっへるぞ、しゅ、しきゆうにいい！」

だんだんとセシルが腰の上下動に慣れて、頻繁に言葉を囁む。

騎乗位のおかげで怒張は確実に子宮まで届いており、小太郎にも「当たっている」のが感覚できた。膣の一番奥に龟头がめり込むポイントがある。

(ボク、ほんとにセシルと……セックスで！)

そこに命中すると、胸がきゅんつとときめいた。痺れつくペニスも、その瞬間は付け根まで粘膜に包まれ、セシルの温もりを満喫することができる。穴の奥でふたりの境界線が溶け、ひとつになっっていくみたいだ。

綾の身体越しにセシルのお尻を、衝動的に捕まえ、ずぶ濡れのスクール水着に指を食い込ませてしまう。

「小太郎殿もっ、れはい、突いてくれ！ こたろおどのを感じたい！」
愛していること、愛されていることが実感できる。

しかも、これだけ激しく求めあっているのに、お尻への愛撫は優しくできた。宥める手つきでくすぐり、あやす。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!